

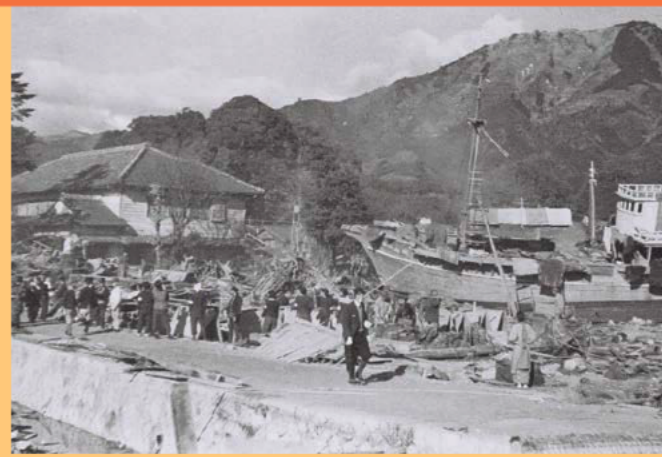
# みえ地震対策の日 シンポジウム

～過去の震災から学び、未来に活かす～

三重県では、昭和東南海地震が発生した12月7日を「みえ地震対策の日」と定め、毎年県内各地でシンポジウムを開催しています。今回のシンポジウムは、鈴木英敬三重県知事、駒田美弘三重大学学長、中村欣一郎鳥羽市長の挨拶で始まり、基調講演、語り部トークなどを通して、地震・津波対策のあり方について考えました。

開催日：2017年12月10日(日) 会場：鳥羽市民文化会館

昭和19年の昭和東南海地震・津波による被害状況(尾鷲市内)  
写真提供：太田金典氏



## 語り部トーク

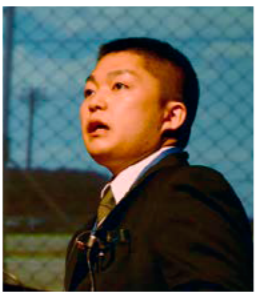
東日本大震災や熊本地震を経験し、語り部として活動する学生2人に震災の教訓を語ってもらいました。

**「震災を経験して伝えたい」と 中学生視点で見た東日本大震災**  
四日市東日本大震災支援の会 安田 要 (三重大学 学生)

震災当日は、田老第一中学校が卒業式の日で、体育館に集まっていた。揺れはちよつと異常じゃないかと感じた。体感としては震度4くらいの揺れが繰り返していった。避難訓練では校庭に集合して終わりだったが、この揺れだと津波が来るのではないかと、避難する話しかかっている最中に津波が来た。初めて波を目撃した時、津波だと理解することができなかった。避難訓練では校庭まで津波が来ることを想定してなかったため、ばらばらに逃げた。学校より高い場所へ逃げた後、立ち止まり振り返ってみたらさきまでいた校庭はがれきの山。家族は無事だったが、多くの身近な人が亡くなった。家族は無事だったが、多くの身近な人が亡くなった。家族は無事だったが、多くの身近な人が亡くなった。

**「地震におけるコミュニティの絆と課題」**  
阿蘇復興への道 井手 良輔 (東海大学 学生)

防災と聞くとやはり備蓄や建物の強化といった物的なイメージが強いと思う。しかし私たちが熊本地震を経験して感じたのは、人的なつながりの大切さだ。私は南阿蘇村(熊本県)に来て2週間ほどで土地勘もなかつたが、地震の際に大学の先輩や下宿の大家さんなど、村の人たちが協力してくれたので私たちが1年生もパニックにならず、それどころか大勢の先輩がどこに避難しているか、この人は就活で県外にいるから探さなくていいなど、そういった情報を共有することで適切な救助活動ができた。日常からコミュニティを大切にしなくてはいけないと感じていて、それが意識せずとも、地震に限らず自然災害への予防に繋がっていくと思う。



## 基調講演

「三重県の地震・津波防災のために」  
～2011年東日本大震災津波・2016年熊本地震の教訓～

公益財団法人 深田地質研究所 都司 嘉宣  
客員研究員



**1 起震断層に非常に近いところに家がある**  
伊賀の木津川断層(四日市断層など)

**2 液状化が非常に起きやすいところに家がある**  
後背湿地、埋め立て地など

**家の耐震化と家具の固定**  
地震への備えについて尋ねると「うちでは水や食料、毛布を用意しています。もしくは「家の耐震化と家具の固定をしています」の2通りの答えがある。前者は補助的なもので、後者がメインであると考へてほしい。

阪神・淡路大震災の際、死者6434人のうち、水や食料、毛布が無いことが原因で亡くなった方は7人のみ。水や食料、毛布の備えは無駄ではないが、**家の耐震化と家具の固定がメイン**。家が倒れないようにする対策、これが一番。

昭和56年以前に建てられた木造住宅は地震対策が十分ではない。耐震診断をして、必要ならば耐震化工事を行う必要がある。耐震化には一軒当たり100万～130万円ほど費用がかかるが、命、家族を守るために工事をしてほしい。

**東日本大震災と児童・生徒の避難**  
石巻市(宮城県)の大川小学校では小学生108人のうち74人が亡くなった。津波警報が出た時、先生はグラウンドで児童の点呼や、子どもを迎えに来た保護者の対応をしていた。それを争う時にそんなことをしてはいけない。一刻を争う時には、一秒でも惜しい時に先生の手を煩わしてはいけない。保護者は子どもを学校に任せ、先生は一刻も早く児童を高いところへ逃がすべき。

小学校の後ろには裏山があり、斜面を登って逃げれば助かったかもしれない。日頃から登山ルートを確認しておくべきだった。避難場所は裏山か橋かで議論になり、津波が上ってくる川に近い橋に避難してしまった。その結果、40分が無駄になり、地震発生から50分後、集団で橋に向かって進んでいる子どもたちが津波にのまれた。

一方、金石市(若手県)には14の小学校があるが、約3000人の小学生は全員が無事だった。津波発生時、中学生と小学生5、6人のグループができた点呼も取らずに、どんどん高台へ避難した。家族がばらばらに津波警報が出たら、お互いに連絡することなく、一人ひとりが決められた避難場所へ行く。これを「津波でんでん二」という。自分が助かるためには逃げろという教訓が生きたと考えられる。



出典：(一財)消防防災科学センター

## パネルディスカッション 「過去の震災から学び、未来に活かす」

パネリスト：鳥羽市教育委員会文化財専門員 野村 史隆 鳥羽市長 中村 欣一郎 東海大学 井手 良輔 三重大学 安田 要  
コメンテーター：公益財団法人深田地質研究所 都司 嘉宣 コーディネーター：三重大学大学院工学研究科准教授 川口 淳

**過去の災害の記録・鳥羽市の取り組み**  
野村 過去の津波を知るのに、地域の石碑の碑文や文献から探る方法がある。約160年前の安政の津波に関する記録が書かれた石碑が鳥羽市にある。立地が良いにも関わらず、海に面した場所に住まなくなったのだらう。安政の津波の時に鳥羽藩は各村々に被害状況を記録させており、お寺の入り口あるいは神社の石段の何段目かまで津波が来たという記録が多々ある。

**神社仏閣は過去の歴史から学び、安全な位置に設置されており、避難場所としても活用できる**と考えられる。

**川口** 地域の中に先人が残した神社やお寺は安全な場所に建てられ、我々に教訓を残してくれている。100年、150年に1回、大変な目にあったからこそ今日まで歴史をつないでいるということと忘れてはいけない。先人の知恵が残る鳥羽市における行政の取り組みは？

**中村** 鳥羽市では「明日へのつばさ」という防災・減災学習プラン集を2017年4月に教育委員会で作成した。気仙沼市(宮城県)に派遣された教員が中心に作成し、学年に応じた取り組みなど、細部まで配慮が行き届いている。鳥羽の羽から翼をイメージしたタイトルになっていて、今後の波及効果や県の「防災ノート」、「MYまっぷらん」との相乗効果も期待できる。

鳥羽には離島があり、地形的にも複雑で、産業も観光、漁業と特徴的な形態を呈している。さまざまなパターンを考える必要がある。取り組めば取り組むほど次の課題が見えてくるが、その繰り返しが防災対策だと考へている。

**川口** 「明日へのつばさ」を今後どうやって子どもたちに伝えていくのが大切だと思う。

**防災教育について**  
**川口** 井手さんは福岡出身で、熊本の大学に行つて2週間で被災。あの地震に遭うまでの、地震に対してのイメージや受けてきた教育について教えてほしい。

**井手** 小学1年生の時に南海の地震を経験した。その時はほとんど被害がなく、やはり何か他人ごとといった感じだった。小学校、中学校の訓練では先生に言われるまま動いていて、自分たちが意識して行動することはなかった。自分の身に降りかかってやっとならぬ意識が変化した。

**川口** 安田さんは、津波が来るまで田老地区でどんな防災教育を受けてきたか？

**安田** 私が通っていた小学校では、充実した防災教育が実施されていて、どの学年も年1回、防災に関する授業と避難訓練を行っていた。私自身も津波に関しては、周辺の小学校の児童より意識が高かったと思う。一方で、田老には先人たちが作った素晴らしい防浪堤があるという教訓を受け

てきたので、なぜ津波に警戒しなければならぬのかというジレンマがあった。

**川口** 井手さんと安田さんが語り部として活動をしてきた手ごたえは？

**井手** 今回のように、自分たちの団体に思いを持って関わっているのがうれしい。しかし同時に、今思っているのは**内部からの風化**。当初は友達との間で震災の話も上っていたが、今となってはその震災というキーワードがなくなり、当事者の中でも風化が始まっていると感じている。

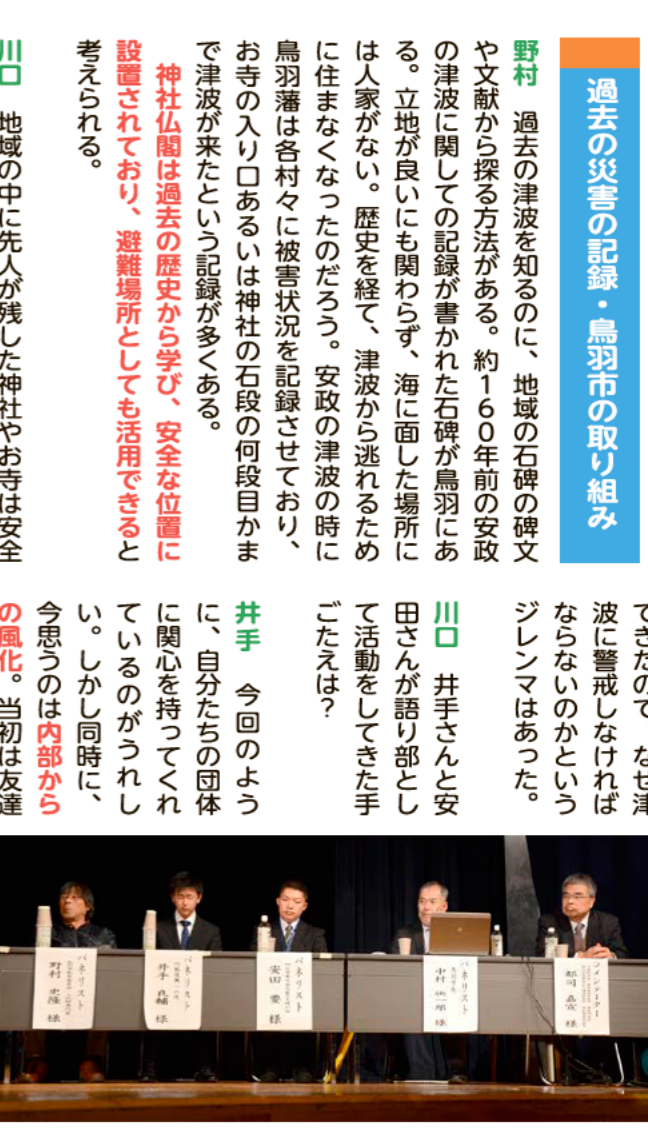
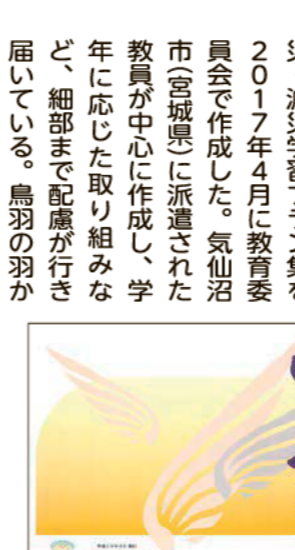
**安田** 手ごたえとしてはまだまだと感じている。先日大学内で避難訓練を行ったが、学生を見てみるとまだ防災に関する意識が低く、避難訓練は前の人についていけないと考へている人が多いと感じた。

**次世代への災害の伝承**  
**川口** 井手さんは当事者内部からの風化、安田さんはまだまだ当事者として伝えられている部分もあるということをおっしゃっていた。災害の教訓を伝えていくために重要なことは何か？

**野村** 南伊勢町の津波では盆踊りに震災の教訓を織り込んでいた地区もある。それでも風化のスピードを多少遅らせるにすぎず、怖さというものは薄れていく。

**中村** 防災活動を行っていく中で、去年と違ったことをやらなければいけないというプレッシャーが多くなる。団体の方にはある程度、しかし、子どもたちは毎年入れ替わっていくので、ワンパターンであることを怖れなくていい。活動を継続していくことが大切。市内にある津波の石碑にペンキを入れるなど、伝承することに力を入れたい。

**川口** 防災に対する意識を「他人ごとから自分ごと」に変え、次の世代にバトンを渡していくためにアドバイス。



## みえの防災大賞

「みえの防災大賞」は、県内各地で自主的な防災活動に取り組んでいる団体を表彰し、県民の皆さんに広く知っていただくことにより、災害に強い三重づくりを進めることを目的としています。シンポジウム当日、受賞団体の表彰を行いました。

## 平成29年度 受賞団体

- みえの防災大賞**  
古和浦親子防災の会(南伊勢町)
- みえの防災奨励賞(50音順)**  
あがた 県地区女性防災クローバー(四日市市)  
伊勢市アマチュア無線災害ネットワーク(伊勢市)  
おろさつ 相差自主防災会(鳥羽市)  
きたに 木谷地区防災会(南伊勢町)  
きょうほく 橋北地区防災組織連絡協議会(四日市市)



## みえ防災・減災アーカイブ

防災・減災活動に役立つ情報をご覧ください  
三重県で発生した過去の災害記録などを収集し、時空間データベースとして、「みえ防災・減災アーカイブ」をインターネットで公開しています。

みえ防災・減災アーカイブ 検索

**midimic**  
みえ防災・減災センター  
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577  
三重大学 地域イノベーション研究開発拠点 A棟3階  
(TEL) 059-231-5694  
(FAX) 059-231-9954  
bosai@crc.mie-u.ac.jp  
みえ防災・減災センター 検索